

----- (はじまり) -----

タケシ「先輩。この部分ってどう解釈すればいいんですか？」

アスカ「今、忙しいからアドバイスは無理！」

タケシ「そんなぁ。明日までにまとめないといけないんですけど...」

アスカ「あんたの仕事なんだから、私には関係ないでしょ。それにあんたもかなりデータ分析には慣れてきたし、この前に提出してもらったレポートも独創的でよかったわよ(微笑)」

タケシ「そ、そうですか？どんなところがですか？」

アスカ「.....(キー入力中)」

タケシ「せ、先輩...。聞いてます？」

アスカ「もう、データ入力を間違えると面倒だから話しかけないで」

タケシ「す、すみません。でも、レポートを評価してもらえて嬉しいです」

アスカ「ふう、終わった。えっと、レポートの話ね。ああいったレポートを提出してもらえると私のチームも評価が上がるのよ。是非、次も頑張ってよ。評価が下がるようなら切り捨てられるわよ」

タケシ「えー、そんな...。そ、そう言えば、この不況で友人がリストラされたんですよ。納期を守って仕事しないと自分たちも危ないですよね」

アスカ「何？リストラ？ああ、私には関係ないから、そんなこと」

タケシ「そ、そうですよね。先輩は優秀だから」

アスカ「今にマーケティング部のトップになって、論文も出して...やることいっぱいよ」

タケシ「そう言えば、前回の社内論文でも先輩、賞総取りでしたよね。他に論文提出した人たち悔しがってましたよ」

アスカ「興味ないわよ。そんな人たち。実力がないだけなんじゃない？早く昇進するには競争に勝ち残らなきゃ。そのためには、多少の犠牲は仕方ないのよ」

タケシ「せ、先輩…。それは、ちょっと冷たいんじゃないか…」

アスカ「…って感じなんだって…」

タケシ「な、何がですか？」

アスカ「サイコパシーの特徴を持った人の話し方よ」

タケシ「え？演技だったんですか？今の受け答え。酷いですよ。背筋がゾッとしましたよ」

アスカ「悪い悪い。他にはどんな感じだった？」

タケシ「うーん。優秀な人なんだけど、ちょっと自己中心的な感じがしました。何か自分が利用されているような。僕の友人にも同じような感じの人がいたし…」

アスカ「ま、そんなところでしょうね。逆にサイコパシーじゃない受け答えをしてみようか？」

タケシ「え？あ、興味ありますんで、是非」

アスカ「じゃあ、今の会話、始めから言ってみてよ」

タケシ「あ、じゃ、じゃあ。せ、先輩。この部分で、ど、どう解釈すれば…」

アスカ「何、緊張してるのよ。普通に話せばいいのよ。じゃ、始めるわよ。あ、少し待っててね。今、手を離せないのよ。5分だけ待ってもらえるかしら？」

タケシ「あ、ハイ。分かりました」

アスカ「5分経ったよ。えっと何が分からないの？」

タケシ「えっと、中央値の扱いなんですけど、去年まで平均値で出していたのに今年になって突然、グラフに中央値が出てきてるんですよ」

アスカ「ああ、あれね。よく気付いたわね。いろいろ事情があるんだけど、今話すと長くなるから就業時間が終わったら説明するわ。一応、資料自体は中央値を前提としてるから、仕事は先に進めていいよ」

タケシ「そうですか。じゃ、そのまま進めます」

アスカ「よろしくね」

タケシ「あ、そう言えば、この不況で友人がリストラされたんですよ。納期守って仕事しないと自分たちも危ないですよ」

アスカ「リストラか…。災難ね。でも、不況って残酷よ。運・不運もあるしね。確かに自分たちだって、安穩とはしてられないわよ。クオリティーと納期との戦いだもんね」

タケシ「先輩のグループは特に厳しいですからね」

アスカ「自分もそうやって育ててもらったからね。あんたもおんなじ運命よ」

タケシ「はは。是非、鍛えてください。先輩に教わるなら文句なしですよ、この前の社内論文だって、先輩が賞総取りでしたよね。他に提出した人が悔しがってましたよ」

アスカ「あれは偶然よ。自分だってびっくりしてるわよ。たまたま書き溜めていた論文が数本あったから出してみただけ。今度はそうは行かないでしょうね。それに他の人たちの論文も見てみたんだけど、興味深いものが多かったら、あんたも読んでおくといいわよ。絶対にためになるから」

タケシ「ハイ！分かりました！」

アスカ「…って感じかな。今度はどんなふうに思った？」

タケシ「え、何かこう、ハートウォーミングな感じですかね。他人への気遣いも感じられるし、この人に付いて行こうって感じでした」

アスカ「やっぱり、かなり違うわよね、サイコパスって。何でもサイコパシーな人の特徴ってのがあって、他人の気持ちが分からない。口がうまい。演技がうまい。自己中心的。損得が気になる。不安を感じない。欲が深い。罪悪感を感じない。だそうよ」

タケシ「そうやって聞くと、とても嫌な人物像ですよ」

アスカ「誇大妄想、被害妄想、攻撃性、自己中心、独占欲、悪魔主義といったパラノイアの特徴と似てなくもないわね。そのサイコパシー的性格だけど、アメリカの刑務所の受刑者でテストしたらしいのよ。一体、何%がサイコパスな人なのかって…」

タケシ「それ、興味あります。どれだけだったんですか？100%だったりして」

アスカ「まさか。15%~25%だって」

タケシ「思ったより少ないですね」

アスカ「それは見方次第よ。犯罪だって、情状酌量を考えたくなるものもあるもの。例えば、何十年の介護に疲れて母親を殺害してしまった、60代の一人息子を誰が裁けるの？」

タケシ「そ、そうですね...」

アスカ「だから、サイコパシーな性格がイコール、犯罪者とは言えないのよ」

タケシ「なるほど」

アスカ「でも、それを逆に考えると、犯罪とは無縁に思える一般人の中にもサイコパシーな人はいるってことになるわよね。怖いと思わない？」

タケシ「はい。先輩の演技でもちょっとゾツとしたくらいですよ。ある友人に似てて、話しを聞いててオーバーラップしましたもん。そいつのこと嫌いなんですよ」

アスカ「私もちょっと苦手ね。そういう性格。でも一説によると犯罪者でない、一般人のサイコパスの割合は1%なんだって」

タケシ「えっ、100人に1人いる計算じゃないですか!？」

アスカ「さっきの刑務所での調査は18才~40才の514人に聞いたものなんだけど、一般人の場合は細かいデータはメモしてないのよね。でも、受刑者を低めの15%と考えて、一般人の調査人数を514人に仮定して検証してみると...」

タケシ「...(ゴクリ)」

アスカ「母比率の差の検定で統計量は8.27286だから、十分な優位差があるわね。つまり、犯罪を犯した人のサイコパシーの割合は一般の人よりも多いってことが言えるみたい」

タケシ「サイコパスな犯人も犯罪を犯す前は、一般人だったわけですよ。サイコパシーな性格の人って犯罪者の予備軍みたいなものなのかな...」

アスカ「一般人からランダムに犯罪者が生まれるならそうかもしれないけど、犯罪を犯す何か別の大きな要因があるなら、サイコパシーな性格が犯罪と結び付くとは限らないわよ。例えば、経済苦とか病苦とか他の精神疾患とかね」

タケシ「なるほど…。でも、ああいう性格の人と付き合うと荒むって言うか、
疲れるって言うか、自分も自己中心的になるって言うか、感化される
ようで嫌なんですよね」

アスカ「サイコパス＝犯罪者とは言えないけど、道徳的な人達と付き合いた
いのなら、サイコパシーな特徴を持つ人とは距離を置くのが無難で
しょうね」

タケシ「そうします。これからは人物観察が大切ですね」

アスカ「うん。まあ、そう言っておいてなんだけど…」

タケシ「まだ何か？」

アスカ「実はそう簡単でもないのよ。ある実験で優秀な経営者と凶悪な犯罪
者のサイコパス度を測定したんだけど、どちらの点数が高かったと
思う？」

タケシ「そりゃ、今の結果から推察すると犯罪者ですよね」

アスカ「それがね、同じくらいなのよ。つまり、経営者はサイコパスってこ
とね」

タケシ「ええーっ！」

アスカ「要は暴力的な要素があるかないかの違いだけなのよ。サイコパスの
要素は持っていてもそれが反社会的な行動に結びつかなければ世間
的には優秀な経営者なの」

タケシ「そ、そんな…」

アスカ「実際に独善的で同情心がない経営者なんて、ごまんというもんね。
例えば、これはサイコパス度を測るテストなんだけど、意外にサイ
コパス度が高い人って多いのよね」

サイコパス度テスト

1. 事前に計画することはほとんどない。行き当たりばったりのタイプである
2. ばれなければパートナー以外の人と浮気をしてもよい
3. もっと楽しい予定が入った場合、以前からの約束をキャンセルしてもよい
4. 動物が傷ついたり痛がっていたりするのを見ても全く気にならない
5. 高速で車を運転したり、ジェットコースターに乗ったり、スカイダイビングをすることに興味をひかれる

- 6.自分の欲しいものを手に入れるためには他人を踏み台にしても構わない
- 7.私は非常に説得力がある。他の人々に自分の望むことをさせる才能がある
- 8.決断をするのが早いので危険な仕事に向いている
- 9.他の人々がプレッシャーで潰れそうになっても自分は落ち着いていられる
- 10.もし私が誰かを騙すことに成功したらそれは騙される側の問題である
- 11.物事が間違った方向に行く場合の多くは自分ではなく他人のせいである

それぞれに、一致すると思う0から3の点数を付ける。

0	1	2	3
-----+-----+-----+			
全く当て はまらな	当てはま らない	当てはまる	非常に当 てはまる

合計がその人のサイコパス度を示す。 合計点 サイコパス度の評価
 =====
 0~11 サイコパス度低め
 12~17 平均以下
 18~22 平均レベル
 23~28 平均以上
 29~33 極めて希なサイコパス

タケシ「計算すると…。僕はたった3点です。よかったサイコでなくて」

アスカ「へえ、稀な人材ね。でも、よく見て。平均を20とすると11の設問で割ると1.8点だよ。すると回答がサイコパスに傾いていることになるのよ。世の中の人って基本サイコパスなんだなあって。まあ、分布次第だけどね」

タケシ「そうなんですか。職業によって違いはあるんですか。あと性別とか」

アスカ「鋭いわね。性別に関しては複数の仮説があるみたいだけど、一般的には男性にサイコパスが多いみたいよ。それで、職業だけだとサイコパス度の高い順にCEO、弁護士、メディア関係、セールス、外科医、ジャーナリスト、警察官、聖職者、シェフ、公務員だって」

タケシ「うーん。意味深長な並びですね。シェフとか公務員は意外だなあ」

アスカ「逆に低いのは順に介護士、看護師、療法士、職人、美容師、慈善活動家、教師、アーティスト、内科医、会計士ね」

タケシ「介護士から3つは分かりますが、職人って頑固でサイコっぽい感じがしてましたが、逆なんですね。あと、会計士とか」

アスカ「そうね。介護士や看護師のサイコパス度が高かったらちょっと怖いもんね。教師とかも」

タケシ「でも、職業的に見てもよくいる普通の人たちですよ。そんな人たちで、サイコパス度が高いってことは...。せ、先輩のサイコパス度って...。どれくらいだったんですか？」

アスカ「それは秘密。でも意外な結果だったわよ」

タケシ「お、教えてくれないんだ...。きっと高得点 g ひあ d x t ...っ痛！」

アスカ「要は意外にみんなサイコパスなのよ。隣にいる人が実は暴力的でないだけで、犯罪者レベルのサイコパスな人なのかもしれないのよ」

タケシ「はい。先輩を含めて以後、気をつけます」

アスカ「どうやら、減らず口の後輩には、より厳しい指導が必要なようね」

----- (つづく) -----

Copyright(C) 2014 rpn hacks! All rights reserved